

007 東大寺ミュージアム&興福寺 南円堂・北円堂・三重塔

10月17日(月)は興福寺 南円堂の年に一度の特別公開の日です。また今年は興福寺の北円堂と三重塔も特別公開されており(特別公開期間10月8日~11月23日)、10月10日には東大寺ミュージアムがオープンしたばかり、今日はこの4ヶ所を満喫しようと奈良へ出かけました。

HP奈良ウォーキングVol.2「奈良・世界遺産を歩く 国宝92点」のなかでも書きましたが、北円堂の本尊 弥勒如来坐像は運慶の作で、南円堂の本尊 不空羂索観音菩薩坐像は運慶の父康慶の作。これを見比べることも、東大寺ミュージアムの不空羂索観音菩薩立像と南円堂の同坐像を見比べることも楽しみの一つです。

南円堂は毎年10月17日が特別公開日、北円堂もこの時期特別公開をしていますので、興味のある方は来年の予定表にでも入れておいてください。

ホテルからは、シャトルバスでJR森ノ宮駅へ行き、鶴崎で近鉄奈良線へ乗り換え、終点近鉄奈良駅で降りる。時間にして1時間で着く。

近鉄奈良駅から地上に出てすぐの東向商店街を右に進み、商店街の中ほどを左に曲がり坂道を上ると、そこが興福寺北円堂である。駅から5分と掛からない。

そこから80M先に南円堂がある。今日は南円堂からスタートだ

興福寺 南円堂 (重要文化財)



南円堂は、831年に藤原冬嗣が父内麻呂の追善のために建立。以降4回の火災に遭うが、その都度再建され、現在の建物は江戸時代1789年に完成。現在でも、西国三十三所観音霊場の第九番札所として厚い信仰を集めている。

現在の本尊 不空羂索観音坐像と法相六祖像(興福寺国宝館に収蔵)、四天王像(現在、仮金堂の四天王像が本来の南円堂のもの)は、1180年の平重衡の兵火での火災後につくられたもの。運慶の父康慶が中心となり1188年6月から1年4ヶ月をかけて完成させた。現在の南円堂にはこのうち本尊の不空羂索観音坐像だけが残る。

不空羂索観音坐像(ふくうけんさくかんのんざう)(康慶作 桧材 寄木造 漆箔 彫眼 像高336.0cm 鎌倉時代1189年 国宝)

南円堂の本尊。不空羂索観音は、手に持つ羂索(網)で、私達の願いをすべてすくい上げ、その祈りを決して空しいものにしないという誓願を持つ。

この像は、透かし彫りの二重円相の華やかな光背をつけ、豪華な蓮華座に結跏趺坐(けっかふざ)する。頭髮を高く結び、宝冠に阿弥陀如来の化仏を付ける。眉間に一目をつけ三目とする。上半身に藤原氏ゆかりの春日大社にちなみ鹿皮を斜にまとう。手は8本あり、その第一手は胸前で合掌。第二手の左手に蓮華、右手に錫杖を持つ。第三手は両手とも脇下にたらし五指を伸ばし掌を前方に向ける。第四手の左手に羂索、右手に払子を持つ。

四天王立像 (桂材 寄木造 彩色 彫眼 鎌倉時代 国宝)
(像高 持国天206.6cm 增長天197.5cm 広目天200.0cm 多聞天197.2cm)

四天王は帝釈天の家来で、須弥山(しゅみせん)の中腹にある四方の門を守護する神で、ここでは本尊不空羂索観音をお守りする。身に鎧をつけ、手に武器を持つ。四軀とも靴をはき、岩座に立つ。動きも大きく、力強い

ももとの南円堂の康慶作である四天王像は、現在仮金堂に安置されているものであることが確実視されている。

だとすれば、現在の南円堂の四天王像は誰がつくり、どこにあったのか。この四天王像の木材が桂材であり、運慶の北円堂の像も桂材であることから運慶作の北円堂にあった四天王像とも考えられている。



南円堂には正面の東側からではなく南側から出入りした。入った瞬間、不空羂索観音坐像に圧倒された。こんなにも大きな仏様が入っていようとは。不空羂索観音坐像は東を向かれて安置されている。南側から堂に入ったので、不空羂索観音坐像の正面ではなく右側面を見ることになるが、その大きさにまず驚いた。八角円堂は死者の鎮魂のための廟堂と、端から思っていたので、この大きさには意表を突かれた。

336cmの大きな坐像を正面から見ると、どっしりと安心感があり、第四手左手に持つ羂索(綱)によって、我々凡人の願いをすべてすくい上げてくれることも信じられるような、しばし合掌。

南円堂のこの四天王像は確かに力強くてリアル。その点で私も元北円堂にあった運慶工房の作品だと思うのだが、いや運慶の作品であってほしいと願っている。興福寺には4組の四天王像があるが、この南円堂の四天王像が一番好きだ。不空羂索観音坐像とのバランスはよく、誰がいつ配置換えをしたのかわからないが、いい組み合わせだと思う。

興福寺 三重塔 (国宝)



南円堂の西南の崖下、つまり興福寺の敷地の西南の端っこに建つ三重塔は、北円堂と並んで興福寺の最古の建造物です。19.1Mの高さで平安時代の建築様式を伝える貴重な建物として国宝に指定されています。

毎年7月7日に公開されますが、今回はそれ以外では5年振りの初層開扉だそうです。猿沢池から階段を上って三重塔を訪うのは中々の雰囲気がありますね。隠れた人気スポットです。

初層内陣にはわずかに彩色が残る、東に薬師如来像、南に釈迦如来像、西に阿弥陀如来像、北に弥勒如来像が各千躰描かれている。

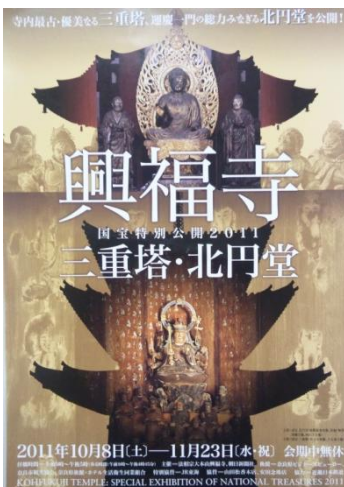
その東内陣に祀られているのが弁才天坐像(江戸時代)、古代インドで「多くの恵みを与えてくれる聖なる水の流れる河」の守護神で農業神でもありました。鎌倉時代以降は弁財天と書かれるようになり、財が強調され財宝、食物、子孫繁栄の神として多に信仰されたという。

開扉された東面から屈み込んで中を覗くと、なんと可愛い高さ38.5cmの弁才天坐像と拳属である十五童子(坐像で15cm前後の像高)が安置されていました。弁才天坐像はふっくらとした顔つきで静かに微笑み、頭には鳥居、翁頭蛇身の宇賀神を戴いている。8本の手にはそれぞれ宝珠、三叉戟、宝輪、弓(左手)、剣、鍵、宝棒、矢(右手)を持つ。

仏像というより雛人形といった感。5段飾りで最上段に弁才天坐像、下4段に2・6・5・2と童子坐像が配置され、最下段には馬・米俵・牛・荷車も飾られていた。



興福寺 北円堂 (国宝)



三重塔から北へ坂道を上ると北円堂だ、普段は塀で囲まれているのだが、発掘調査のため塀は取り除かれていた。毎年春と秋に1か月半公開されている。三重塔とともに興福寺最古の建物で国宝。

興福寺の創建者である藤原不比等の一周忌に、元明・元正天皇が長屋王に命じて建てさせた八角円堂。1180年の兵火で焼失し1210年頃再建された。

南円堂仏像が康慶(運慶の父)の作品群ならば、北円堂仏像9躰は運慶の作品群だった。本尊の弥勒如来坐像・脇侍菩薩2躰・無著・世親・四天王像4躰ともに運慶工房の作品だったが、脇侍2躰は後世のものに変わり、四天王像は大安寺のそれと変わっている。

弥勒如来坐像(運慶作 桂材 寄木造 像高141.9cm 鎌倉時代1212頃 国宝)

仏教の始祖釈迦の後継者といわれ、56億7千万年後にこの世にあらわれて迷い苦しんでいる人々を救うといわれている仏である。藤原鎌足・不比等もこの弥勒を信仰していたといわれる。

顔がキリリとして力強さを感じる。体軀も堂々としバランスがよくリアルな仏様、手を合わせると身が締まる感がする。





法苑林・大妙相菩薩半跏像（桧材 寄木造 室町時代）
弥勒如来の脇侍菩薩。まだ金箔に光沢があり、北円堂では新参者。

無著（むじゃく）・世親（せしん）菩薩立像（運慶作 桂材 寄木造 鎌倉時代
1212頃 国宝）（像高 無著菩薩 194.7cm 世親菩薩 191.6cm）
我が国肖像彫刻の最高傑作。圧倒的な存在感があり見るものを釘付けにする。無著の修行僧ゆえの柔和な眼、世親の確固たる視線。実に素晴らしい。リアル 写実 本物、言葉が出ない。これが運慶だ！
無著、世親は5世紀に北インドで活躍した兄弟の学僧で、興福寺の法相宗の宗義を事実上まとめあげた人である。

四天王立像（木心乾漆造 平安時代791年製作 国宝）
（像高 持国天136.6cm 増長天136.6cm 広目天139.7cm 多聞天134.7cm）

増長天と多聞天の台座の框裏に書かれた墨書で、大安寺に伝来し791年に製作されたものとわかる。4軀とも奈良時代に流行した木心乾漆造りで、荒彫りした木の上に厚く木屑と漆を混ぜたものを盛り上げて整形したもの。鎌倉時代のリアルな運慶作品とは全く違う四天王像を、なぜここに配置しなければならなかったのか？ 像高からいっても無著・世親菩薩より60cmも低くバランスが悪い。南円堂の200cmの四天王像をあてはめると迫力満点の仏像群となる。その光景を是非見たいものだ。

東大寺ミュージアム



東大寺の至宝を展示する東大寺ミュージアムが10月10日にオープンした。巨大地震にも耐える「部屋免震システム」を施した現代の正倉院だ。

場所は南大門を通過してすぐ左。入館料は500円。展示室は広くゆっくり観ることができる。館内には喫茶コーナーもあり、夏など涼むにはいい所だ。

オープニング企画として、「奈良時代の東大寺」と題し、来年4月1日まで開催されている。

東大寺といえば大仏と南大門。興味のある方は法華堂、二月堂、戒壇堂などの建物や仏像を見に回遊されているだろうが、新たな東大寺の鑑賞スポットが出現したことは間違いない。

日の目を見ずに眠っていた宝物がこれだけあったとは、これからの企画催しものが楽しみだ。

入口から順番に主だった展示物を紹介すると、

誕生釈迦仏立像及び灌仏盤（かんぶつばん）

（国宝 銅造 鍍金 像高47.5cm 盤径89.2cm 奈良時代）

釈迦の誕生日とされる4月8日に、童形の右手を挙げた釈迦像（誕生仏）を金だらい（灌仏盤）に乗せて香水をかける仏生会（灌仏会）の儀式が古来盛んに行なわれた。

その大仏殿での仏生会で実用に供されていたものと目される。

今日では大仏殿前に設けられた美しい花御堂の中に本像の模像が奉安され、香水（甘茶）をかけて祝う、4月8日恒例の花まつりとして有名。

金銅八角燈籠火袋羽目板（鉸子ばっし） 国宝 奈良時代

大仏殿の前にある八角燈籠（国宝）の羽目板のこと。実は盗難にあい欠損している本品を展示、大仏殿前にある八角燈籠には盗難前の姿を新補したものが取り付けられている。

ちなみに、八角燈籠の西南面の羽目板には横笛、西北面に縦笛、東北面に鉸子、東南面には笙を奏する音声菩薩（おんじょうぼさつ）が表されている。

東大寺金堂鎮檀具（ちんだんぐ） 国宝

簡単にいえば、大仏さんの蓮華座のふもとに埋蔵されていた品々。儀式具というより大仏様への献納品か。銀の小壺、水晶、鏡、大刀などいずれも奈良時代の工芸技術の粋を集めたもの、正倉院宝物に匹敵する。

なかでも最近注目を集めたのが、金銀荘大刀二口。刀身にそれぞれ「陽劔」「陰劔」の象嵌銘があることがX線撮影によりあきらかになった。聖武天皇遺愛の品で正倉院「国家珍宝帳」では759年に除物の付箋を付けられ、



持ち出されていた大刀。その大刀が大仏の足元に埋葬されていたことが1250年ぶりに判明したことだ。光明皇后の意思によるものだろうが、国家安泰、聖武天皇の冥福を祈る想いが込められていたものだろう。なお、実物は修理のため展示されていないが、X線写真等が展示されている。

西大門勅額（重要文化財 木造 縦286.4cm 横289.7cm 額面:奈良時代 八天王像:鎌倉時代）
かつて東大寺の正門としての機能を有し、南大門をしのぐ規模を誇ったという西大門に掲げられていた巨大な門額。
額面に聖武天皇の宸筆と伝える「金光明四天王護国寺」の文字を楷書で刻み込み、これを守護するように梵天、帝釈天、金剛力士、四天王が取り囲む門額。目の前で見れるので実物の大きさに圧倒される。八天王像は快慶の作とみられる。1180年の兵火による西大門の損傷修造後に額面に取り付けられたものらしい。

不空羂索観音(ふくうけんさくかんのん)立像（国宝 脱活乾漆造 像高 362.0cm 奈良時代）
展示室の中央に鎮座する。法華堂の本尊。法華堂の須弥壇が修復工事中のため仮住まい。
最近の調査でその須弥壇に729年伐採のヒノキが使われていたことがわかり、堂・基壇・仏像の相互関係と年代観について、全面的な見直しが必要になっている。不空羂索観音立像こそが東大寺草創期の実態を知っているのだろう。
展示室の不空羂索観音立像は、豪華な装飾を施した冠と光背、手に持つ各具を修理のため取り外しており、すっきりとしたお姿でリラックスされている感がある。8本の手やその指ののびやかなこと、普段（法華堂）では見られないお姿は一見の価値はある。

日光菩薩立像・月光菩薩立像（国宝 塑造 奈良時代 像高 日光206.3cm 月光206.8cm）
法華堂においても不空羂索観音立像の脇侍像として配置されている。広い展示スペースに3体が配置されているので、日光・月光両菩薩も主役の像として拝観できる。法華堂の時と違って見飽きない。
元々は、日光・月光両菩薩と戒壇堂の四天王像は奈良時代から不空羂索観音立像の拳属として法華堂に安置されていたらしい。どうりで6体ともに塑造で大きさから作風までよく似ているわけだ。

菩薩半跏像（重要文化財 銅造 像高 32.8cm 奈良時代）
寺伝では聖武天皇の念持仏とする像。展示ケースに収まり360度から拝観できる。

釈迦如来坐像・多宝如来坐像（銅造 像高 釈迦25.0cm 多宝24.2cm 奈良時代）
戒壇堂創建当時の本尊であつたらしい。

弥勒仏坐像（重要文化財 木造 像高 39.0cm 平安時代）
良弁僧正の念持仏と伝承され、「試みの大仏」という俗称もある。

その他、聖武天皇の宸筆される賢愚教(巻第十五 国宝)の墨書や東大寺に伝わる古文書・出土品などが展示されている。

今回展示されている宝物のほか、まだまだたくさんの宝物があり、このように常設展示場として一般公開されることはいいことだ。不空羂索観音立像にとどまらず、本来のお堂での拝観とは違って、この展示ホールでの拝観では違った一面を観ることができる。これからも展示の妙を感じさせる企画を継続してほしい。

興福寺南円堂・三重塔・北円堂、東大寺ミュージアムと、お会いしたかった仏様にお会いできて、今日は実に楽しい一日でした。ホテルから1時間で興福寺に行けますので、拝観時間を含めても4～5時間でホテルへ戻ってこれます。是非、秋の奈良公園を楽しんでいただきたいと思います。

なお、今年は北円堂・三重塔の公開は10月8日から11月23日まで、東大寺ミュージアムは無休、奈良公園内にある奈良国立博物館では毎年恒例の正倉院展が10月29日から11月14日まで開催されました。来年もほぼ同じ時期に開催されますので来年の参考にしてください。

